資料館ノート　第 134 号　　令和元年7月 16 日発行

杉浦日向子の視点 ～江戸へようこそ⑤～

杉浦日向子の様々な仕事

江東区深川江戸資料館

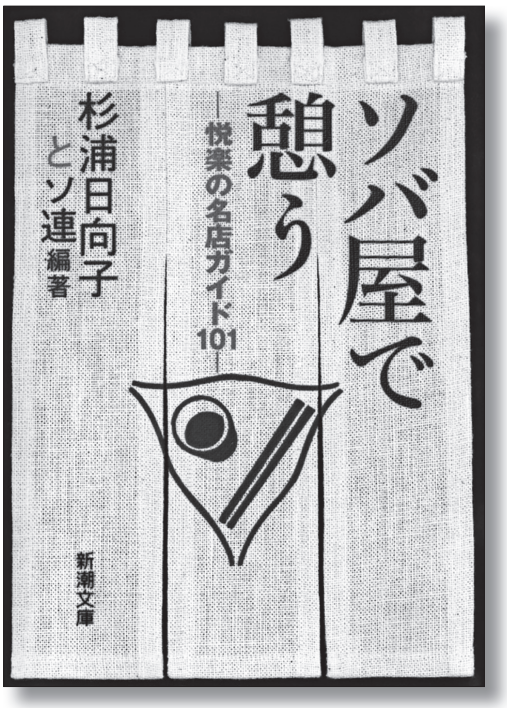
江戸風俗研究家として知られている杉浦日向子は、江戸に関する雑誌や書籍、漫画を執筆する以外にも様々な仕事をしていました。本号では、江戸風俗研究家以外の仕事のなかから、エッセイや装丁などについて紹介します。

1．ソ連（ソバ好き連）

杉浦日向子はソバが好きで、ほぼ毎日食べ、3日も食べないと体がおかしくなるというほどの無類のソバ好きです。ソバ屋の空間が大好きで「ソ連」という集まりを作りました。「ソ連」とはソバが好きなソバ同好会「ソバ好き連」のことです。「連」とは江戸時代にあった同好の士によって構成された集まりを指します。

杉浦はソバ屋をこよなく愛する「ソ連」のメンバーに名を連ねます。その活動は、北は北海道から、西は四国まで、東北上越信州関東はもちろん、名古屋の街なかも、ディープな香川のお遍路へもうまい「ソバ」と「酒」（と「湯」）を求めて訪れたといいます。

その活動は、ソバ屋で憩うひとときを気の合う人とソバを食べてお酒を飲む、雰囲気を楽しむことです。憩うことが大事で、ソバをたぐりながら変な話や色恋、仕事の話はしないという和むための決まり事があったそうです。



杉浦日向子とソ連 編『ソバ屋で憩う－悦楽の名店ガイド 101－』（新潮文庫 /1999）

『ソバ屋で憩う』（ピー・エヌ・エヌ /1997）では 72 店を、『ソバ屋で憩う－悦楽の名店ガイド 101 －』（新潮文庫 /1999）では 101 店を、そして『もっとソバ屋で憩う－きっと満足 123 店－』（新潮文庫 /2002）では 123 店が掲載され、前書から新たに増補改訂し出版しています。また、これはソバのグルメ本ではなく、おとなの憩いの提案をする本だとしています。ソバを批評するものではなく、ソバ屋という、身近なオアシスを楽しむ本と述べています。

「ソ連」のメンバーには、杉浦がデザインしたソバッチ（ソ連バッチ）が配布され、そのバッチはソバの実の形をして、3辺がお蕎麦 1 本ずつでできています。蕎麦猪口（ちょこ）と割り箸で「ソ」という文字を作り、必ず「ソ」と読めるように装着すべしという決まりがあるそうです。

深川地域では、現在店名が変わりましたが「京金」が取り上げられています。「ソ連」は現在でもメンバーが集まって例会を開催しています。

2．路上観察学会

路上観察学会は、街中のマンホールや煙突、看板、ハリガミ、建物のカケラ等々、路上から観察できるすべてのものを対象とした集まりで、昭和 61 年（1986）学士会館前で発会式が行われました。

その中心は、赤瀬川原平（画家、作家、前衛芸術家）、藤森照信（建築史家、現江戸東京博物館館長）、南伸坊（イラストレーター）、林丈二（デザイナー、作家）、松田哲夫（筑摩書房顧問、路上観察学会事務局長）らでした。赤瀬川と松田は学生時代から付き合いがあり、路上観察学会というものを作ろうとした際に杉浦も興味があったことから加わったそうです。漫画やそれ以外の仕事が忙しいなか、杉浦も折々に参加していたそうです。

活動では、あらかじめ先入観をもって見るよりは、街に出て変なもの、面白いものを見つけたら写真を撮るということをしていました。

路上観察学会の会員が編集した書籍には、赤瀬川原平、藤森照信、南伸坊編『路上観察学入門』（筑摩書房 /1986）をはじめ、赤瀬川らに加え杉浦

も著している『路上探検隊讃岐路をゆく』（宝島社/1993）、『路上探検隊新サイタマ発見記』（宝島社/1993）、『奥の細道俳句でてくてく』（太田出版/2002）等があります。

3．体験取材 3 部作

杉浦は平成 4 年（1992）から 6 年にわたり講談社の『小説現代』に体験取材のエッセイを連載しました。『東京イワシ頭』（講談社 /1992）、『呑々草子』（講談社 /1994）、『入浴の女王』（講談社 /1995）として、のちに書籍化されそして文庫化されました。

本体験取材は、杉浦が名付けた編集者のポアール・ムースと一緒に各所を訪れ、そのエッセイとイラストを杉浦が担当しました。

(1)『東京イワシ頭』

本書は、「怪しいもの」＝「イワシ物件」と位置付けて、バブル末期に東京に徘徊していた魑魅魍魎たる「怪しきもの」を匿名で体当たり取材した爆笑随筆です。「イワシの頭も信心から」という諺にちなみ、イワシの頭のようなつまらないものでも、信じるとひどく有難く思う通り、時代の区別なく街にはさまざまなイワシの頭が登場しては消え、消えては登場するものを題材にしています。

例えば、浅草の「黒焼屋」へ行き、孫太郎虫を求めたり、原宿の占い村や歌手のディナーショーへ行ったりと、東京の「イワシ」を取材したものです。

(2)『呑々草子』

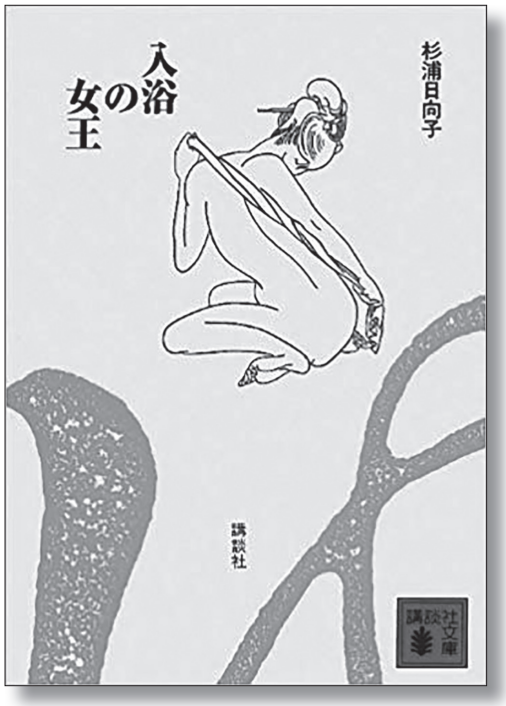
本書は、杉浦の希望で東京という枠を外し、全国へとその枠を広げ、また「イワシの頭も信心から」という枠も外し、行きたいところに行くというもので 2 年間連載されました。

本書の中で、はとバスに乗り東京観光をしていますがその際に深川江戸資料館を訪れています。そのなかで、時間が押せ押せで見学時間が 20 分足らずになってしまったが、「きめ細かな作りで、抑えた照明の中、小鳥のさえずりや遠い物売りの声が聞こえる。」「もし、蝋人形がスポットライト毎に配置され、説明テープが朗々と流れるなら、やっぱり南無三うなだれる事だろう。」と、当館を評しています。

なお、単行本と文庫新装版の装丁は杉浦自身が行い、表紙は兄の鈴木雅也が撮影した杉浦と愛犬クロの写真が使われています。これは、兄の雅也に杉浦が装丁の仕事を一緒にやりたいと持ち込んできたもので、「楽しかった」と言っていました。文庫版の装丁は『入浴の女王』で縁のあった久住昌之（漫画原作者・漫画家）が手がけています。

(3)『入浴の女王』

本書は、東京を中心とした銭湯をテーマに 2 年間色々な場所へ行き綴ったエッセイです。その町のお湯につかってその町のことを書く、いわゆる銭湯ガイドではなく、地元にしっかり根付いた銭湯という場所を通じて、日本のさまざまな町の色、町の素顔、町の文化を描きだしたものです。また、その土地の男性にナビゲートをしてもらうという約束事もありました。



『入浴の女王』（講談社文庫 /2012）
杉浦日向子の装丁です

それらを本書では、本日の汁（銭湯名）、本日の具（ナビゲーター）、椀盛（入浴タイム）をはじめ、「よいん」「あしらい」「酒盛」等、入浴から湯上がりに酌み交わしたもの等が記されています。

『呑々草子』でも装丁を手がけた久住昌之とは同い年の上、デビューも一緒の『ガロ』同期生というゆかりもありました。本書の中で、彼に三鷹市の「三鷹湯」をナビゲートしてもらっています。

4．装丁

杉浦は江戸に関する著作やエッセイの他にも、装丁の仕事も手がけていました。

自著の装丁の他にも、村上龍『ニューヨーク・シティ・マラソン』（集英社 /1986）や林丈二『街を転がる目玉のように』（筑摩書房 /1989）、三木卓『となりの人』（講談社 /1991）等の装丁を手がけています。

【図版以外の参考文献】
赤瀬川原平　他編『路上観察学入門』（筑摩書房 /1986）
『東京イワシ頭』（講談社 /1992）
『呑々草子』（講談社 /1994）